

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	池田 誠喜
2. 審査委員	主査：(鳴門教育大学 教授) 前田 洋一 副主査：(鳴門教育大学 教授) 阪根 健二 委員：(鳴門教育大学 教授) 田村 隆宏 委員：(上越教育大学 教授) 林 泰成 委員：(鳴門教育大学 教授) 木内 陽一
3. 論文題目	レジリエンスを実現するための学校教育実践に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 池田 誠喜 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時:令和元年12月23日(月) 10時20分～11時20分 場所:鳴門教育大学 人文棟6階 A3会議室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>論文の構成は次の通りである。</p> <p>序章 問題の所在</p> <p>本論文は、人が困難な状況においても無事を保っている姿、もしくは、ダメージから回復する姿をイメージさせるレジリエンスという心理学的な概念を取り上げ、ダメージを受け苦境に曝されていても健全な精神を維持・回復する人を積極的に育てて行こうとする取り組みを支える基礎的な理論の構築を目指している。レジリエンスは家族の影響が大きく関わっていることが知られているが、近年、その家族自体が個人の発達に悪影響をもたらし、望ましい発達を阻んでいるケースが非常に多く見られる現状がある。また、コミュニティが機能不全の家族をサポートするような関わりもなくなってきた。そのため、学齢期の子どもたちの成長発達に関わる学校教育の役割がさらに重要となってきた現状が見られる。そこで、学齢期の発達支援の重要性を鑑み、学校教育現場でレジリエンス育成の支援できるのではないかと仮説を提示し、その検証を試みている。</p> <p>本論文では、子供たちが学校教育でレジリエンスを実現し、望ましい発達を獲得するために以下に示す調査を実施し、学校教育でレジリエンスを実現するための方略を構築することを研究の目的としている。そのための方法として、(1)先行研究よりレジリエンスの概念及び実践報告をレビューし、その実態の整理、(2)関連する心理学的概念との異同を踏まえた学校教育に活用するためのレジリエンス実現の取り組みの実践と定性的検証、(3)レジリエンスの概念を取り入れた教育実践成果の定量的調査による検証、(4)定性的調査及び定量的調査の結果に基づいた実践・検証を行うこと、の4点を示している。</p> <p>第一部 レジリエンスとは何か 第1章 レジリエンス研究</p> <p>本章では、児童生徒の望ましい発達を予測し、学校適応や学習達成にも効果を発揮すると期待されるレジリエンスについて、発達精神病理学、発達心理学、臨床心理学、欧米の学校教育におけるレジリエンス研究及び実践を調査し、レジリエンスの実態を詳細に明らかにしている。加えて、レジリエンスの定義の比較検討、レジリエンスの近似概念との異同について検討を行い、心理学的構成概念としてのレジリエンスが、どのような領域と関連しているのか、定義の曖昧さが示しているものはなにかを探り、レジリエンスの全体的なコンセプトを提示した。</p>

第2章 学校教育とレジリエンス

本章では、レジリエンスの考えを学校教育活動に取り入れるため、欧米の学校で取り組まれたレジリエンスアプローチを調査し、理論的考察を行っている。その一つとして、レジリエンス教育を採用した歴史的経緯とともに、学校教育に取り入れた欧米の学校での実践事例を紹介している。ここでの理論的考察を踏まえて、本研究におけるレジリエンスの定義を「困難な状況やダメージを受けた状態においても、環境との相互作用の中で、回復もしくは健康を維持するための心理的機能の働きを活性化して、再び環境との相互作用において立ち直りを実現する道」とし、レジリエンスをプロセスとして捉えるKumpfer(1999)のResilience Frameworkモデルを取り入れたレジリエンスアプローチを構想した。

第3章 レジリエンスアプローチの構築に向けて

レジリエンスを実現するためのアプローチを構築するにあたり、レジリエンスが発展してきたこれまでの経緯を踏まえ、レジリエンス研究の基礎を作ってきた「発達精神病理学」とレジリエンス概念が包含されているポジティブ心理学領域のアプローチを検討し、レジリエンスを実現するための要因や方法についての検討を行っている。さらに、生物・心理・社会モデルの視点からレジリエンスを検討し、生物学的なストレス反応とレジリエンスの関係についてまとめた。最後に、これまでのレジリエンス概念の理論的整理を基に、学校教育におけるレジリエンスの実現に向け、①ネガティブな原因やリスクを取り除こうというモデルではなく、良い面を伸ばす、知られていない面を開発する、というストレングスアプローチの視点、②学校教育の期間に成功体験や活動に熱中するなどの経験をさせる取り組み、③その場での効果だけではなく、長期的な効果を念頭に置いた教育実践、④ポジティブな感情を起こさせるための相補的なコミュニケーションの実践、という4つアプローチを構想した。

第二部 学校教育におけるレジリエンス実践事例研究と調査研究

第4章 教師評価による短期縦断的探索研究

第5章 レジリエンス実現を目指した実践①

第6章 レジリエンス実現を目指した実践②

第7章 レジリエンス実現を目指した実践③

本章では、第1章～第3章までに整理したレジリエンスの知見を基に、ダメージを受けた中学生の回復を図るレジリエンスを実現するための実践事例報告するとともに、新たに実践から得られた結果について定量的調査を実施した。その結果、レジリエンスの実現に寄与する要因を報告し成果と課題について論じた。

第8章 レジリエンスアプローチ実践事例からの分析

本章では、事例実践報告の検証結果を整理して分析を行い、レジリエンスアプローチの成果と課題について検討した。検討した内容は、レジリエンスを実現するためのアプローチの効果及び妥当性、学校教育への浸潤の度合いで、それぞれの成果と課題が示された。

第9章 スクール・エンゲージメントとレジリエンシー及びストレス反応の関連

学校教育において、レジリエンスの実現に寄与する概念であるスクール・エンゲージメントを取り上げ、レジリエンスの関連を定量的な手法を用いて検証した。結果、中学生がスクール・エンゲージメントの状態を保つことにより、中学校生活内外で良好な帰結・結果・状況を導くスクール・エンゲージメント-レジリエンシー関連パスモデルの適合が示された。

第10章 スクール・エンゲージメントによるレジリエンスを実現する取り組み事例

スクール・エンゲージメント-レジリエンシー関連パスモデルを用いた実践事例を報告した。事例の検証の結果、スクール・エンゲージメントがレジリエンスの実現に寄与することが示唆された。

第三部 レジリエンスアプローチの学校教育への適用

第11章 レジリエンスアプローチの学校教育への適用

各事例の報告から、レジリエンスアプローチの効果について理論的な考察を行った。4つのポイントの考察を整理すると、レジリエンスがポジティブな志向に関係が深く、誰もが持ち合わせている力や道具を発揮する場を提供することによって良循環を作り出すことが示唆された。レジリエンスアプローチで掲げた4つのポイントは循環サイクルの中に組み込まれており、どのポイントからスタートしても4つのポイントが活性化する可能性があることが示唆された。このことから、学校教育で行われるレジリエンス実現のための取り組みは、特別な取り組みではなく、現在のシステムを変えなくても、現行の学校カリキュラムの中でも十分取り組める可能性があることを示した。

終章 結語と今後の課題

課題として、生得的な要因によるレジリエンスの実現の難しさや現時点での限界について言及した。

2. 審査経過

本論文の審査は次の3つの観点を用いて行った。

(1) 論文の独創性

本論文の独創性としては、今日の子供たちの望ましい発達のため、実際的な活用を目指して学校教育への適用を試みたとともに、実践の検証を踏まえ、学校教育においてレジリエンスを実現するための理論的枠組みを提供したことである。特に、実際的なものとするために、学校の教師が実践することを前提として、ネガティブな原因やリスクを取り除こうという治療的なアプローチではなく、良い面を伸ばす、知られていない面を開発するアプローチの視点を用いていること、成功体験や熱中するなどの経験を通して育むこと、長期的な効果を念頭に置いていること、ポジティブな感情の生起による相補的コミュニケーションの実現を目指していることをベースとした理論的枠組みを提供したことである。

(2) 論文の発展性

本論文で示された研究の方向性は、今後のレジリエンス研究において必要不可欠な視点が認められる。心理学的構成概念であるレジリエンスは、これまで多くの研究が心理学領域や精神病理領域で進められ発展してきたが、近年、ストレス研究における神経生理学的な研究の発展により、生物学的視点によるレジリエンス研究が広がりにつつある。本論文では、レジリエンス概念について生物学的・心理学的・社会的モデルを用いた理論的研究が行われており、今後の脳神経科学等の発展の可能性を鑑みると、妥当性が高められ、より統合された概念として捉える研究となることが期待できる。

(3) 学校教育の実践への貢献

学校教育への貢献として、今日の学校教育で目指されている「生きる力」の育成に寄与する可能性がみられる点である。レジリエンスのコンセプトは、ダメージから回復する姿、困難な状況から立ち直る姿をイメージさせるものである。これまでのストレス研究では、ストレスサーに対して頑強もしくは屈強な姿であるハードネスやストレスサーを回避するストレスコーピングを身につけることによる備えを試みられていたが、実際にはダメージを受けない人間はおらず、傷つきながらも立ち直って行く姿が現実的である。このような実際的な人間の捉えを前提とした学校教育におけるレジリエンス実現の試みは、困難に直面している児童生徒の回復に寄与するとともに、課題に満ちた現代社会を生き抜く上での力の育成につながるものとして期待できるものである。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 池田誠喜 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。